

平成28年 5月26日

平成28年

第5回教育委員会定例会会議録

大田区役所 教育委員会室

平成28年第5回大田区教育委員会定例会会議録

平成28年5月26日（木曜日）午後2時から

1 出席委員（6名）

芳賀 淳 委員	委員長
藤崎 雄三 委員	委員長職務代理者
横川 敏男 委員	
鈴木 清子 委員	
尾形 威 委員	
津村 正純 委員	教育長

2 出席職員（10名）

教育総務部長	水 井 靖
教育総務課長	井 上 隆 義
副参事（教育政策担当）	曾 根 暁 子
副参事（教育施設担当）	布 施 満
学務課長	森 岡 剛
指導課長（幼児教育センター所長兼務）	増 田 亮
副参事	田 井 俊 行
学校職員担当課長	佐 藤 國 治
教育センター所長	岩 田 美 恵 子
大田図書館長	五ノ井 巖 暢

3 日程

日程第1 教育委員の報告事項

日程第2 部課長の報告事項

~~~~~  
(午後2時開会)

○委員長

ただいまから、平成28年第5回大田区教育委員会定例会を開会いたします。

本日は傍聴希望者がおります。

委員の皆様には傍聴許可を求めます。許可してよろしいでしょうか。

(「はい」との声あり)

○委員長

傍聴を許可いたします。

(傍聴者入室)

## ○委員長

大田区教育委員会傍聴規則第7条により、傍聴人は、議場における言論に対して批評を加え、または拍手その他の方法により公然と可否を表明することは禁止されております。ご協力よろしくお願いいたします。

これより審議に入ります。本日の出席委員数は定足数を満たしていますので、会議は成立しています。

まず、会議録署名委員に津村教育長を指名いたします。よろしくお願いいたします。

続いて、本日の日程第1について、事務局職員の説明を求めます。

## ○事務局職員

日程第1は、「教育委員の報告事項」でございます。

本日は、藤崎委員より報告がございます。よろしくお願いいたします。

## ○委員長

それでは、藤崎委員より報告をお願いします。

## ○藤崎委員

今、私は、年間大体3回ぐらい、多いときは4回ぐらいの割合でカンボジアのほうに行っております。これは公務ではなくボランティアなのですが、そこに携わっている活動のうちの一つで、日本語を教えている中高一貫校がございまして、「カンボジア日本友好学園」というところがございます。どういうところなのかということと、またカンボジアという地域というのは、なかなか接点が普通はないので、この報告を機にちょっとご紹介をしたいなと思ひまして、今回、このテーマで皆さんにご報告をしたいと思ひます。

基本的には、写真ベースがメインだと思ってください。（パワーポイントを見ながら）まず、カンボジアということなのですが、国土面積は大体日本の半分弱ぐらいの大きさです。ちなみに下の黄色い数字が日本だと思ってください。それを対比することで、白いほうがカンボジアとなっています。

人口、平均年齢と書いてありますが、実はカンボジア政府調べというものと、民間調べというものと、それから日本のJICAが出している、貿易振興会が出しているものと外務省が出しているのが微妙に違っていますので。おおよそ、おおむねぐらいの数字だということで、ご了承いただければと思ひます。人口は大体10分の1ぐらいから8分の1ぐらいです。

次に、知っておいていただきたいことですが、平均年齢、これ国民の平均年齢です、平均寿命ではないです。おぎゃあと生まれた、今日生まれた人から、お亡くなりになる寸前の方までの平均年齢が、日本は男女合わせて約46歳、46.2歳とか言われています。それに対して国民全体の平均年齢が、カンボジアの場合は25歳、25.01歳、非常に若い国です。

ご存じのとおり政変等もいろいろございまして、20年ぐらい前のポル・ポト政権時に、

カンボジア人同士が殺し合う内戦がありました。外敵であれば、国民一致団結して次に向かってと言えるのですが、国民同士の殺し合いだったということで、悲惨な状況があるわけなのですが、基本的にはポル・ポトさんがその国を治めるにあたって、俗に言う知識人を徹底的に粛清。当時、その数字もいろいろあるのですが、300万人ぐらい粛清されたというふうに言われております。

一般的に知識人と申し上げましたが、まず読み書きができる大学教授、その家族一族郎党、赤ちゃんも含めて全部殺すというようなことがありました。人口ピラミッドが異常にいびつな状態になっていて、俗に働き盛りと言われていた40代、50代がほとんどいないのです。そしてその暗黒時代を乗り切った方が、上のほうに少し。それからあとは、もうとても若いのです。そういう過去の暗い内戦時代があったので、現在、平均年齢がこのようになっているということです。

一方で若いゆえに、今、経済も発展しておりまして、右肩上がりになっております。彼らも根拠もなく、来月のほうが絶対給料上がっているに違いないというような気持ちで前に進んでいます。非常に貧富の差は激しいのですが、陽気な貧しい人たち、そういうような感じが国民性としてはあります。

首都のプノンペンには50階建てのビルが、首都の一部ですけれども非常に近代的な状況になっています。そこから数キロ離れたところは、貧しいところということで、その両者が同居している状態にあるのです。

教育のほうに戻りますと、教育制度としては小学校、中学校、高校6・3・3制で、日本とこれは一緒です。うち小学校、中学校が義務教育。学校が少なく、子どもの数が多くアンバランスになっておりますので、基本的に授業は午前・午後、4時間での入れかえ制というのが普通になっております。

教育事情を多少補足しますが、一応、公表されている数字で小学校の就学率は95%になっているのですが、特に経済的な事情で、毎年1年たつごとにどんどんと退学していく。出ていく。要は食べていくためには親の手伝いをしないといけない、というようなことで退学者が出ている状態です。

2011年のカンボジア国内の報告を見ると、小学校に大体95%入ったということになっているのですが、卒業している人間は、7割切るぐらい。中学校はさらにその方たちが中学校に上がっていくのですが、2割切るぐらいの卒業率です。ちなみに高校の数字は見つかりませんでした。大学進学率は正式な数字ではありませんが、0.7%から1%というような推計というものが出されております。つまり学校はあることはあるのですが、なかなか通えてないという状況です。

一方で、大金持ちたちは、授業料が高額で、セキュリティーがしっかりしているアメリカンスクールとかインターナショナルスクールに通っています。

実は普通のカンボジア人だと一生行けないだろうなというレストランに子どもたちだけで集まって、そこで、どんちゃん騒ぎをしている、トランプをしているような家庭もあるのです。非常に貧富の差が激しいというような状況になります。

この中で今日ご紹介する、カンボジア日本友好学園というのは、首都のプノンペンからベトナムのほうに、車で3時間ほど陸路を移したところにあります。俗に言う田舎のまちです。プレイベン州という隣の州の田舎町にあります。中学校が設立されたのが1998年。

2002年に高校を併設しました。

創設者がコン・ボーンさんというのですが、この方はもうカンボジアでは珍しい、今年80歳になる方です。あの25歳の平均年齢の国での80歳。ということは、普通の子どもたちからすると神様みたいな。「80年生きているんだ」みたいな、そんな方なのですが。この方は共同通信で働いていたことがありまして、日本語がしゃべれます。俗に言う知識人の一人なので、ポル・ポト政権に追われ、隠れていたのですが捕まりました。処刑寸前に逃げ出して、日本にまでやってきました。

ちなみにこのコン・ボーンさん、先ほど80歳と言ったのですが、この一人息子とその奥さんは今現在、横浜に住んでいます。そのお子さん、つまりお孫さんは、やはりカンボジアと日本との関係ということをもう一回紡ぎたいということで、今、カンボジアに戻ってカンボジアと日本のかけ橋になるべく、向こうで教育をやっているそうです。

この友好学園の話に戻りますと、生徒数が約1,500名弱、教員数は39名、これが正式な雇用されている人間で、そのほかにパートの方が4名、アドバイザーが1名。授業は入れかえ制ではなく1日6時間ということになっており、日本語を補習授業として提供しております。日本人の方が住み込みで校内に住んでおり、その方が日本語を教えているということになります。

ちなみに友好学園の、先ほど39名と言いましたが、そのうちの半分ぐらいの人たちと食事をしながらインタビューをさせていただいたので、幾つかをご紹介します。

まず、「この学校の生徒の特徴は」と聞いたら、ちゃんとルールを守ります。とにかく人が見ていなければやらなくていいやとか、盗んでもいいやとかいうような国民性というところとちょっと言い過ぎですが、そういうような慣習が多い中で、貧乏だからですけど、ここは勉強だけでなく、しつけも教えているので、まず子どもたちはルールを守っています。カンボジア人としての誇りとか、恩返しと書いたのは何かというと、彼らは、例えば10人兄弟だったとしても、生活が苦しいので兄弟を代表して私だけが教育を受けに来ていますという人たちが集まっているのです。なので、家族のために私はとにかく勉強で身を立てる。要は親たちに恩返しをするというような気持ちを持って通っている人が多いのです。そういう気持ちもあり、何か人の役に立ちたいというようなことを思って、道徳心も持ちながら通っているというのが、生徒たちの特徴だということです。

「先生としてどんな子どもたちを育てたいのですか」と聞くと、まだ混乱時代からそんなに時間がたっておりませんので、この国をよくしていく人を育てたいと言います。ほかの学校では通常はないような朝礼もあり、なぜ勉強する意味があるのかとか、先ほどのコン・ボーンさんがみんなの前で、世界は今どうなっているのか、勉強する意味は何があるという講話を聞かせたりしているのです。

この「教鞭をとりながら大学院に行ける」と書いたのは何かというと、まず、公立の学校の教員の給与というのは、月4ドルとかです。ほとんど400円、500円程度ですので、当然のことながら先生方はバイトをしています。教員として正式に雇われているのですが、バイトのほうがお金がよかったりすると、学校を休校にしたりします。今月お金が足りないのと言って、子どもたちは集まっているのに先生は来ない、そんな状況なのです。

ところが、ここはコン・ボーンさんが寄附金を集めているということがあるからです

が、兼業しないように、しっかりと授業に徹底するようにと給料を払っているの、ちゃんと学校の先生としての職業を保ちつつ、その気になれば自分も勉強ができるというのが特徴です。とはいえ、それでもやはり生活していく上では、そんな裕福なわけではないです。理念ということ、ここに掲げながら頑張っているのです。

次に遠距離の通学者が多いと書いたのは、この後映像を見せますけど、バイクで通って来ている、自転車で通って来ている、徒歩で通って来ているという子に分かれるのですが、遠い子は、片道2時間半かけて歩いて学校に来たりしています。月曜から金曜日の授業のほかに、土曜日の朝8時から10時までの2時間は、生徒みんな、先生も出てきて教室をきれいにするとか、校庭を整地するために鍬で石とか掘り出す活動をしています。土曜日の2時間の清掃のために、朝5時半に家を出て学校に来るのです。鍬を持って来て2時間清掃して、またねと言って2時間半かけて帰っていく。そういう気持ちを支えているものは、やはり自覚だと思います。

よく一般的に言われている、日本もそうなのですけども、日本人の有名人、著名人がお金を集めて向こうに小学校や中学校を建てています。俗に言うハードと言いますが、外側の入れ物、箱物をつくる、そういったことがあるのです。私の勝手な思い込みだったのですが、外側はつくったけどソフト面、教師の質を高める指導が弱いのではないかと思っていました。「意味がないのではないか」と投げかけたときに、先生たちが異口同音おっしゃったのは「違う」と。「先生を育てることはできる。勉強したい子もいる。だけど集う場所がなければそれすらできないのだ。だから藤崎さん、あなたはソフト面がおざなりになっていて、ハード面ばかりですみませんね。みたいなことを言うけど、それがいいことには始まらないのだ。まだまだ校舎は欲しいのだ。」というような言い方をしていました。

また政府の意向としては、1クラス40人という、40人クラスというのをうたっているのですが、実情は、友好学園では1クラス60人。もう満杯で、ぎゅうぎゅうの状態です。

私が実際に行ってやっていたことは、1週間学校に寝泊まりをしながら1日2コマぐらい中学生ないしは高校生の授業を受け持つことです。

私は企業研修とかをやっているの、そこで使っているようなチームビルディングのワークを遊びながらやりました。

一緒に行った他の人は、例えば日本の『かごめかごめ』とか、『花いちもんめ』を教えたり、またほかの人は、5年後の自分に手紙を書かせるとか。そういういろいろなことをやりましたが、内容はともかく日本語を勉強している学校なので、日本から日本人が来て、直接やりとりができるということで、もう十分価値があるのです。異文化に接すること、ということも含めて価値があるということでした。

ここからは、ちょっと画像になります。この右側の方がコン・ボーンさんという方です。3年ぐらい前の写真なので、私も三つぐらい若い。カンボジアの旗と日本の旗は学校の正面に常に掲げてあります。これが正門になります。ちなみにこれは学校の校舎ですが、学校の通学の様子は、こんな感じです（動画）。学校の裏が国道です。学校の正門の前に、ちょっとした食べ物屋さんがあって、子どもたちはここで朝御飯を食べたりとか、お昼御飯を持ってこなかった子はここでちょっと果物を買ったりしています。

自転車の子、バイクの子、歩きの子。ちゃんと制服は支給されていて、基本的にはライ

トブルーのシャツと、女の子はロングのスカート。女の子は基本的には長い髪の毛が多い、ショートカットの子はほとんどいなかったです、長い髪の子は結っています。これは通学風景です。これも校庭から見た校舎になります。ここは一見きれいに見えるのですが、石とかがたくさんあって、でこぼこしたりしています。子どもたちは、はだしでサッカーをしたりするのですが、先ほど言った、週末にみんなで整地をしてきれいにして、少しずつ学校をきれいにしていこうというような運動をしています。

これが、私が泊まっていたところです。学校の敷地内にありまして。奥に見えるのは、校長室とか、学校の事務をやったりする建物です。私がここに泊まったときに、虫がすごく多くて、小学生以来ですが蚊帳の中で寝ました。これ校舎です。一つの建物が、大体ここからここら辺まで。教室としては五つか六つぐらいある校舎ですが、当時、3年前に言われていたのは、この1棟を建てるのに大体200万円。

これは教室内です。これは何の勉強をしているかは、ちょっと私もわからないのですが、何かを指さしていますね。これは日本人の先生です。住み込みの日本人の先生、多分、日本語の勉強の授業の一環だと思います。大体1クラスに60人。中高一貫校ですので、中学1年生から高校3年生が6学年。ですから、先ほどの通っている子どもたちを6で割る、最低1学年250名ぐらいという計算になります。

これ、日本語の補習の様子です。奥にいるのが横田さんという、住み込み教師の方です。この住み込みなのですが、全部自費でボランティア。生活費から何から全部自分で払って、無給で働いています。もう4年、向こうに住んでいるとのこと。

これ日本語のノートですね、勉強していますね。

これは私が課外授業として、外でチームビルディングをするのに競争させたりとか、協力させたりしたものです。彼らが教室に入るときは、基本裸足なのです。この校舎、ここにスリッパが並んでいるの、わかります。ここで脱いで、室内は裸足なのですが、これ見てもらったらわかるのですが、外へ出ても裸足なのです。それでまたスリッパ履いて、またスリッパ脱いでいるので、教室の中もほこりっぽくて。

これは一つのクラスで授業をやらせてもらった後の写真です。ちょっと幼く見えますが、高校2年生です。この時の授業で出てきた質問の質というか内容が非常におもしろかったのです。3年前、2013年だったのですが、何でも聞いていいよと言ったときに、どんな食べ物が好きですかとかそれぐらい出てくるのかと思ったら、まず1問目が、「富士山が今回世界遺産になるけど、日本人にとって富士山というのは何なの。」でした。これはまずいと思って、ちょちょいのちょいでやってはいけなくて、とにかく自分の持っている知識を全部出しました。そこで、「自然遺産でいきたかったのだけど、ごみの問題があって、文化遺産として再度挑戦して、それで今、登録しているのだよ。」という話をしました。「富士山というのは、私自身も別に信仰しているとか宗教とかではないのだけど、何か見ると落ちついたりとか、手を合わせたりするのだよね。」と言ったら、その次はすぐ「日本人と宗教の関係」「何教なのか」と質問がきました。

ちょうど津波があった年なので、今、東北で地震と津波と原発の関係はどうなのかとか。古い話でいうと、長崎と広島は、まだ都市として成り立っているのかとか。かわいいところでいうと、幾つかからアルバイトしていいのかということもありましたけど。その興味関心の度合いがすごい。それは興味のある国の話だからかもしれないですが、すごく私は

びっくりしました。

先ほど言ったように2時間半かけて歩いてきている子たちが、50人、60人目の前に座ってこっちを真剣なまなざしで見ていると、にわか教師の私でさえ背筋が伸びるのです。子どもたちの力で先生を育てるといふこともあるといふのを、そのときに強く感じました。もしかしたら三日間でも、このようなすごく真剣な目の前に立って背筋が伸びる思いをすれば、それだけで先生のリフレッシュ研修に十分になるなと思いつつ、あのとき立っていました。

先ほど言ったように学校の先生の給与もほかの公立よりは多目です。また、生徒の中にはお金が途中で払えなくなる子もいるけれど、奨学金制度もあります。これはひとえに、最初に映したコン・ボーンさんという設立者が自分の著書のお金とかを出したり、寄附金も彼を募って出している人が多くいたりしたので賄えている現実があります。でも、80歳のコン・ボーンさんがお亡くなりになった瞬間に、これが立ち行かなくなります。今みんなの一番のリスクは、コン・ボーンリスクです。

ということなので、彼らは自分たちでお金を稼ぐ、作るということも考えるために、今、いろいろなプロジェクトを立ち上げています。そのうちの大きいものが、日本の徳島商業高校と提携をして、このカンボジアのプレイベン州の特産品、何かお土産物になる商品、製品をつかって、それを売ったお金で学校の援助にしていこうというようなことを実践しています。これはカンボジアと徳島をつないでSkypeミーティングをやっているところです。実際に徳島から選ばれた生徒がカンボジアに来て一緒に打ち合わせをしたり、企画を立てたりしながらやっています。これ商品です。今、バナナとココナッツを原産としたおまんじゅうをつかって、それをプレイベン州の地元の名産品にしようと、いろいろ徳島商業の先生、生徒たちからもアイデアをもらいながら、フレンドまんじゅうという名産品をついているのです。

こうやって実際にまちに出たり、展覧会があったりすると売りに行ったりします。ちなみにこの価格10ドルと表記されています。カンボジアは自国通貨リエルというのがありますが、基本的にはドル経済です。アメリカドルが流通していて、アメリカドルがないときに、おつりに時々自国のカンボジアリエルが出てきます。そういう経済です。

一方で、今度はカンボジア人、この6人が先生です。選ばれて、今度徳島商業に来て、徳島商業の人たちとやりとりをしている。実際に、一緒になって作ったものを、この日本の中でいろいろなところに出ていって、試食をしていただいたりとか、これが製品になっていくためにどうしたらいいかというアドバイスをいただいたりしているようなことです。

多分、徳島のところのどこかのデパートか何かで、ブースをつかってやらせてもらっているのだと思います。

報告は以上ですが、教育ということに触れてはいるものの、なかなか他国、他県、他区という情報というものが入ってこない部分もありますので、今回は機会をいただきましたので、カンボジアの学校事情、一部限られているところではあるのですが、皆さんにご紹介しました。

私は、子どもって無限な可能性を常に持っていて、それって大人がその機会をどれだけつくってあげるかどうかにかかっていると思っています。可能性は、本人たちが諦めてし

まったく仕方ないのですが、周りの大人たちが諦めさせないように、どういう知恵や工夫を出していったらいいのだろうかということ、この写真を見るたびに思い出すことをお伝えさせていただいて、今回の報告にさせていただきたいと思います。

どうもありがとうございました。

#### ○委員長

ありがとうございました。

それでは、ただいまの報告にご意見、ご質問などありませんか。

#### ○教育長

このカンボジア日本友好学園は私立ですか？

#### ○藤崎委員

私立です。

#### ○教育長

日本でいうと学校法人になるのか、そういう法律上の制度があるのでしょうか。その辺がどうなっているのかということと、それから、こういう私立の学校が占める割合というのはどのぐらいなのか、その辺はわかりますか。

#### ○藤崎委員

ごめんなさい。ちょっとその数字は持っていません、すみません。

#### ○教育長

基本はやはり、公立の小中学校ですか。

#### ○藤崎委員

そうですね。公立の経営は、基本的にはお寺がやっています。

僧侶が老人ホームもやっているし、保育園もやっている。とにかく持てる者が持てない者に対して施しをするというのが通例なので、基本的には孤児院も含めて、お寺が公立を運営しているところが多いです。

ですので、例えば僧侶が歩いていると、周りからワッと人が集まってきて会釈し、寄進する姿を、頻繁に見かけます。完全な仏教国です。

#### ○教育長

でも、お寺って日本的な感覚でいうと、宗教法人ですよ。

#### ○藤崎委員

はい。

## ○教育長

でも公立なのですね。

## ○藤崎委員

その法人格ですが、それはちょっと私も勉強不足で、わかりませんが。

## ○委員長

先ほど、高校生の日本についての質問というのが、かなり難しめな質問が出てきましたが、カンボジアから難民の方が日本に来たとか、そんな関係もあったり、それなりの縁というか、今までの交渉や歴史もあるようなのですが、日本に行ってみたいとか、日本に対する印象というのは、どんなふう感じているのでしょうか。

## ○藤崎委員

これも数字では申し上げられないのですが、好きか嫌いかというのと、大体の方、好きだと言います。それは例えばインフラ、病院とか橋とか、『日本橋』という名前をつけたものが何個あるのかなど・・・。

やはり日本にちなむ名前がついているところからみて、相当手伝ったりはしているので、近い存在にいると思います。

## ○委員長

先ほどの写真を見るとバイクがいっぱいありますね。東南アジアだとホンダがバイクの代名詞みたいになっていたりしますが・・・。

## ○藤崎委員

バイクは99%ホンダです。

車は、「よくこの国で」と思うのですが、なぜか、走っている車の7割以上はレクサス。残りが、トヨタです。

バイクは他のヤマハとかカワサキも入ってきたのですが、セカンダリーマーケット、要は再度売るというときに、ホンダのバイクは価格が落ちないのです。ホンダ神話なのです。故障しないということもあるかもしれませんが。確かに、どんな性能がいいのが入っても、再度売るときに必ず価格が落ちてしまう。ホンダは落ちないのです。

レクサスは、本当に考えられないぐらい走っているのですが、どう考えても普通の国民所得を考えると買えないはずなのです。これはやはり、なかなか表に出てこないアングラマネーはたくさんあるのだろうなということと、アメリカから大体輸入をされてきているのですが、どうも事故車が多いようです。例えばハリケーンで水没して、一回水に全部浸かったとか。新品は新品に見えるのですが、エンジンは不良だとかいうのはあるらしいです。

バイクは平気で5人乗りとかしています。お父さん、お母さん、その間に子どもが二人。一度6人乗りというのを見ました。そばにいたカンボジア人が、あれ6人乗りだよと

言ったので、どう見ても5人だったのですが、後ろに座っているお母さんがバケツを持って、そのバケツの中に赤ちゃんが・・・ということでした。基本的には何をするのもバイクなのです。豚を二頭運ぶのもバイクだし、野菜を運ぶのも、そんな感じでした。

### ○委員長

ポル・ポト政権が倒れたのは、20年、もうちょっと前だったと思うんですけど。

そのときに知識人がみんな大虐殺というのか、大幅に亡くなった。そうすると学校をつくるにしても、いわゆる教員的なところがポコッとあいているわけですよ。推測ですけど、とにかく急造でも何でもいいから、先生というものをつくらにやいかんというので、まず恐らく向こうの第一世代みたいなのがあった。ただ、それがしばらくたつていくと、再生産が回り出す時期に来ているのか。そのあたりはどんな感じなのか。

### ○藤崎委員

残念ながら、教員というのはお金にならない、食べていけないということになってくると、結局ほかのところに持っていかれてしまうので、せつかく育てた先生たちが、お金で結局教員にならないとか、やめていくという悪循環がまだ続いているんですね。

今回ご紹介した学校のように正式に雇って、他で働かないように、ないしは働かなくていいようにという賃金を保障している学校というのは、そうそうないのです。先ほど話したバイト三つかけ持ちで、ホテルのボーイをしながら学校の教員をして、ホテルが忙しいと言われたので、時給が高いホテルで働き、学校は休校。生徒たちは、先生が来るのをずっと待っています。そんなこともあります。

ただ、先ほど言ったように、右肩上がりの経済成長なので、いいことがあるに違いないという、何かしら根拠のない自信というのが、かなりあちこちで感じられます。ですので、悲惨とか暗いかと問われると、そうでもない。それなりの建設ラッシュですし、公害問題も実際に発生していますが、経済の伸びに、上塗りされているという状態にあります。

### ○横川委員

ここを卒業した子どもたちというのは、大体どういうコースに行きますか。

### ○藤崎委員

カンボジアはクメール語がベースなのですが、そのほか、英語は学校を出ている子は大体しゃべります。それに加えて日本語だとか中国語だとかベトナム語だとかという、第三カ語が出来ると就職がすごく有利になるのです。この学校の子たちは、基本的には都会に出ます。プノンペンないしはシェムリアップというアンコールワットがある町、大体その二つです。都会に出ていって通訳を中心に、あとは日系企業に就職をしているという感じですよ。

### ○横川委員

大学なんか行く子たちもいるわけですか。

### ○藤崎委員

大学に行く人もいます。先ほど、国全体での大学進学率は1%というふうに申し上げたのですが、この高校を出た人は20%ぐらいが、行くようになっています。

### ○尾形委員

この学校の先生方が見て、子どもたちの課題というのは、どんなものがありますか。

### ○藤崎委員

子どもたちに対する課題というよりも家庭に対する課題で、頼むから学校に来させてほしいというのが、先生がおっしゃっていたことです。

それは、家に食べるものがないとか、畑仕事があるので、子どもを来させられないのもわかるのだけど。家の力仕事の一員として働かせているうちに、外に働きに出してしまうケースが多いのです。だから先生方に、子どもに対する課題というか困っていることありますかとか、要望することありますかと聞くと、「子どもに直接はない。親に対して学校に来させてほしい。でもそれは無理強いできないけど。」というのが出てきた意見でした。

### ○尾形委員

ありがとうございました。

### ○教育長

ある意味では明治期の日本ですね。

### ○藤崎委員

まさに義務教育ができ始めるころの……。

### ○教育長

同じ一言で教育といっても、その社会における、あるいは時代における教育の意味というのはやっぱり異なっている。逆に日本みたいに成熟している社会における教育というふうになると、一体何のために学ぶのかよくわからないという。カンボジアの例にしても、あるいは明治期なりの教育の例にしても、逆にシンプルですよ。貧困から抜け出す道として教育がある。その点はとてもわかりやすいです。目標が見えやすいところかなと思います。

### ○藤崎委員

これは余談ですけど、今、大田区では、中学生にアメリカとドイツに行かせていますが、同じ位置付けではなくてもいいですけど、右肩上がりってどういうことなのかというアジアの国の視察。そういうのを中学生にもちょっと見せてあげられるといいのかなと、個人的には思います。

## ○教育長

これは、大学の先生から聞いた話なのですけれど、そこの大学生を中国に、一昔前まさに右肩上がり、みんな働くにしても学ぶにしても、もう意欲満々というようなところへ、今でもそうでしょうけれども、その社会に大学生をつれていった。さっきの話と同じですけれども、自分は何をやったらいいのか、人生においてどうやって生きていったらいいのかわからないという思いを持っている大学生を連れていったら、やはり物の見方が全く変わったと聞きました。

## ○鈴木委員

私自身、常々非常に環境が大事だと思っています。さきほどの教育長からのお話もありましたけど、時代によってその時々教育が変わっていく。家庭のお話が出ましたが、結局、教育を受けたいという気持ちというのは、できないからこそ余計意欲が湧くのだらうと思うのです。戦後の日本のことを考えますと、いろいろ聞いた中で、やりたいのだけどできないというところで、もっともっと意欲が増してくるというように受け取れるのですけれど。

家庭のなかの環境で、させてあげたいのだけどできないという親がいるのと、あるいは、子どもが行きたいのだけど、家庭を思うとなかなか頼めないという部分がある。

最後にもうひとつ伺いたいのが、今、授業をしている場所、ハードの部分はできましたけれども、お水だとか食べ物だとかそういう部分はいかがですか。弁当を持っていくとか、全員の子どもがちゃんときちんと弁当を持って行けるのでしょうか。多分いられないだらうなと推測するのですが、そういったところはいかがでしょう。

## ○藤崎委員

あそこの学校に来ている子どもであれば、ある程度はお弁当を持って行くことができると思うのです。フルーツが…通学の途中でバナナをもげば、マンゴーをもげば……。

## ○鈴木委員

勝手にとる。

## ○藤崎委員

一応、食べるものに困らない、死にはしないというところが、まだ楽観をキープしている一つかもしれない。寒い国では、着るものだって大変です。ここは雨季と乾季がありますが、1年間の平均気温が30度ぐらいですから。今、そこまで困っているという感じはしないです。

ただ、話を聞いて思い出したことですが、お金を何に使うかですね。田舎にいと、食べることに直結ですが、都会に出てくるとスマホを買いたいとか、バイクを買いたいとか。生きる死ぬということに関係がないところになってきたときに、「最近の若いやつは」という声が出てきていると、確かに聞いたなと今、ちょっと思い出しました。

### ○鈴木委員

日本の場合には非常に環境が整っていると思っっているのですが、例えば学校に行ったときに、体調崩すとか。そういったことは……。

### ○藤崎委員

あまり聞かないですね。

それで体調を崩したというのは、少なくとも私がいた間では、そんな話はなかったです。食べてなくて倒れたとかですね。

### ○鈴木委員

結局、保健室。日本の場合には環境を整えた保健室、様々入ってきているのですが。

### ○藤崎委員

一応、養護の先生はいらっしゃいましたけど。薬が置いてあるかというところ……。

衛生面でいうと、雨が一回降ると、まち中でもひざまで水がたまるという状態です。ですので衛生面は確かによくないと思います。

### ○鈴木委員

ありがとうございました。

### ○教育長

せっかくカンボジアの学校のことをご報告いただいたので、大田区とカンボジアとのつながりみたいな話になるのですが……。

今は行っておりませんが、以前、8月15日の午後に、大田区議会が超党派で実行委員会をつくって、平和祈念コンサートを10回以上継続して続けていました。そこで得た収益については、認定NPO法人「JHP・学校をつくる会」というのがあって、これは脚本家の小山内美江子さんが代表を務めていらっしゃるのですが、そこを通じて、カンボジアの学校をつくるということで教育支援をしておりました。そういう意味で、大田区としてもつながりがあります。

### ○委員長

前回、オリンピックに絡んで一校一國運動みたいな、多分カンボジア担当の学校もあるので、ご紹介できたりすると、何か楽しい交流ができるかもしれませんね。

では、藤崎委員、どうもご報告ありがとうございました。

それでは、次の日程に移ります。

日程第2について、事務局職員の説明を求めます。

### ○事務局職員

日程第2は、「部課長の報告事項」でございます。

## ○委員長

それでは、部課長の報告をお願いします。

## ○学務課長

資料) 平成28年5月1日現在 在籍者数一覧

それでは、小中学校在籍者数についてご報告いたします。

前回の教育委員会定例会におきまして4月7日現在の在籍者数をご報告したところでございますが、本日は、学校基本調査に基づく5月1日現在の確定数字をご報告するものでございます。

それでは、資料1枚目の表面、小学校からご説明いたします。

本区の児童数の総計でございますが、表の一番下をご覧ください。大田区立小学校在籍児童数総計は、2万8,655人でございます。また、その右側にあります大田区立小学校学級数総計は、957学級でございます。平成27年5月1日現在と比較しますと、児童数で73人の増。学級数で2学級の増となっております。

次に、1枚目裏面の中学校についてご説明いたします。生徒数の総計でございますが、表の一番下に記載ございますが、大田区立中学校在籍生徒数総計は1万1,123人で、その右側にあります学級数総計は、343学級でございます。昨年、5月1日現在と比較しますと、生徒数で31人の減となっておりますが、学級数については1学級の増となっております。

2枚目の資料を御覧ください。

こちらは、今年度から全小学校で実施しております特別支援教室、それから難聴や言語など通級によります特別支援学級、それから日本語学級の児童生徒数を記載してございます。左側の表の特別支援教室でございますが、昨年度までは他校への通級により指導しておりました発達障害等のある児童への指導を小学校全校で実施することによりまして、昨年5月1日現在ですと233人でしたが、今年度は約2.4倍の551人と大幅に増えているところでございます。

私からの説明は以上でございます。

## ○大田図書館長

資料1) 平成27年度刊行 文化財調査報告書

資料2) 大田区の文化財第41集『大田区の祭り・行事、民俗芸能調査集録』

私からは、平成27年度大田区の文化財関係刊行物についてご報告いたします。

こちらのシリーズは、隔年ごとに建造物や美術品などといった文化財の報告と、埋蔵文化財の報告と交互に刊行をしております。平成27年度につきましては文化財に関するもので、書名は「大田区の祭り・行事、民俗芸能調査集録」でございます。内容につきましては、前半は区や都の指定文化財である民族慣習や民俗芸能、後半は指定文化財ではございませんが、祭りや行事、民俗芸能に関し現状調査や聞き取りなどを行い、調査集録としてまとめさせていただきました。

今回の印刷部数は600冊でございます。うち有償販売を150冊、無償配布を450冊とさせ

ていただきました。販売価格は700円でございます。郷土博物館及び本庁舎2階の区政情報コーナーで販売をいたします。無償配布につきましては、区役所関連部局といたしまして、図書館16館の全小中学校、また各調査にご協力いただいた関係機関などがございます。

私からは以上でございます。

#### ○委員長

ただいまの報告について、ご意見、ご質問はありますか。

では、これもちまして、平成28年第5回教育委員会定例会を閉会いたします。

(午後2時55分閉会)